発表番号：P016
（HP用番号：P-2-8）

機関をこえたURA連携の意義とは ～人社系URAネットワーク10年の軌跡と展望

JINSHA
Japan Inter-Institutional Network for Social Sciences, Humanities and Arts

◎川人 よし恵 （大阪教育大学） ◎新澤 裕子 （東京大学） 荒木 裕子 （広島大学） 飯塚 三保子 （中央大学） 稲石 奈津子（京都大学） 臼澤 基紀（東北大学） 島岡 未来子（早稲田大学） 白井 隆志 （大阪大学）
中野 悦子 （北海道大学）平澤 加奈子 （東京大学） 平田 充宏 （神戸大学） 藤川 二葉 （京都大学）丸山 浩平 （早稲田大学） 森本 行人 （筑波大学）山田 綾子 （大阪大学）李 香丹 （新潟大学）

■ 人社系URAネットワークとは～

JINSHA（Japan Inter-Institutional Network for Social Sciences, Humanities and Arts）

・人文･社会科学系分野特有の支援の方法などに関する相談･情報交換の場として、2014年、阪大･京大･筑波大のURAでネットワークを発足。
・「人文･社会科学系研究推進フォーラム」や「JINSHA情報共有会」の開催を通し、URA、研究者、事務職員、府省・資金配分機関担当者などが、ともに人社系分野のよりよい研究推進のあり方を議論。

◎主な活動 ：Chatworkを使った意見・情報交換、人社フォーラム、JINSHA情報共有会、オンライン交流会の開催など
◎幹事校： 13校（2024.10現在）
大阪大学、筑波大学、京都大学、早稲田大学、琉球大学、北海道大学、横浜国立大学、中央大学、広島大学、東京大学、東北大学、新潟大学、神戸大学（参画順）
◎個人メンバー： 58名（2024.10現在）
◎ネットワークへの参画条件：

機関
✓ 組織としての参画許可
✓ フォーラム/情報共有会のいずれかを1回以上主催 他機関が主催の時は共催の形で企画・運営協力

個人
✓ 幹事校のURA、またはそのOB／OG

活動状況など

■ 活動の背景

FY2011	FY2012	FY2013	FY2014	FY2015	FY2016	FY2017	FY2018	FY2019	FY2020	FY2021	FY2022	FY2023	FY2024
●リサーチ・アドミニストレーター（URA）を育成・確保するシステムの整備（～FY2016）		●研究大学強化促進事業（～FY2022） ● JSPS・先導人社事業開始	●人社系URAネットワーク発足！	● 国連でSDGs採択 ● 文系学部不要論	●第5期基本計画：学際的・分野融合的研究の推進	●学術会議：学術の総合的発展をめざして ―人文・社会科学からの提言―		● JST/RISTEX: SOLVE for SDGs開始	●国内大学に初のELSIセンター設立 ●JST/RISTEX：ELSIプログラム開始 ●文科省：学術知共創プロジェクト	●改正科技・イノベ法 施行 ●第6期基本計画：人社・総合知のモニタリングに言及	●内閣府：「総合知」中間とりまとめ		●文科省：人社DX化事業開始

■ 人社フォーラム・JINSHA情報共有会におけるテーマの展開

凡例 人社フォーラム JINSHA情報共有会 連携先

問題意識の共有

F#01, FY2014
人文・社会科学系研究推進に必要な共通基盤整備を考えよう
S#01, FY2017 ｜ 文系軽視・理系偏重が日本を減ぼす
S#04, FY2018 ｜ 研究推進・支援に役立つ資料リスト2018を作ろう

F#02, FY2015
人文・社会科学系研究推進の三手先を考える

F#03, FY2016
地域社会が抱える社会課題の解決や新たな価値創造
S#02, FY2017 ｜人文社会科学系研究者をプロデュースする：個が輝く取組み
S#03, FY2017 ｜ TSUKUBA index Web公開記念シンポジウム

F#04, FY2017
人文・社会科学系研究の未来像を描く ―研究の発展につながる評価とは
S#06, FY2019｜研究の発展につながる評価とは –研究評価の未来を洞察する–
S#07, FY2019｜責任ある研究評価測定（Responsible Metrics）とURAにできること
S#09, FY2020｜責任ある研究評価を考える –大学・研究機関にとっての責任ある研究評価とは–
S#11, FY2021｜Responsible Metrics and Multilingualism: A review of evolving Asian perspectives
S#13, FY2021｜責任ある研究評価を考えるシリーズ ～定量的評価指標の現在と未来に向けた課題とは～
S#14, FY2022｜責任ある研究評価を考えるシリーズ ～一歩前へ進むための「地図」作成～
S#19, FY2024｜「社会的インパクト」を「評価学」の視点から考える

F#05, FY2018
人文・社会科学系研究を振興するファンドとその支援

F#06, FY2020
人社主導の学際研究プロジェクト創出を目指して

F#07, FY2021
人文・社会科学系研究が創造するイノベーション
S#05, FY2018｜SDGsのその先へ ～社会とアカデミアの応答を生み出すための５つの質問～
S#08, FY2020｜異分野融合研究プロジェクトにおける URAの役割について考える
S#10, FY2021｜超学際研究の可視化
S#12, FY2021｜Powered by人社支援
S#15, FY2022｜最近よく聞く「総合知」って何? ―人文･社会科学の視点から―
S#18, FY2024｜人文・社会科学系研究の挑戦が望まれる課題と研究のデザインについて考える

F#08, FY2022
ELSIに取り組むURAの在り方
S#17, FY2023｜イチURAからみた、ELSIの対応と実践

F#09, FY2023
JINSHA kaleidoscope
－人社系研究のコアバリューを引き出す研究支援のあり方とは－
S#16, FY2023｜人社系研究が創造するイノベーション：URAが果たす機能とは？

JSPS 文科省 JST NPO ミラツク De-Silo 日本学術会議 C4RA

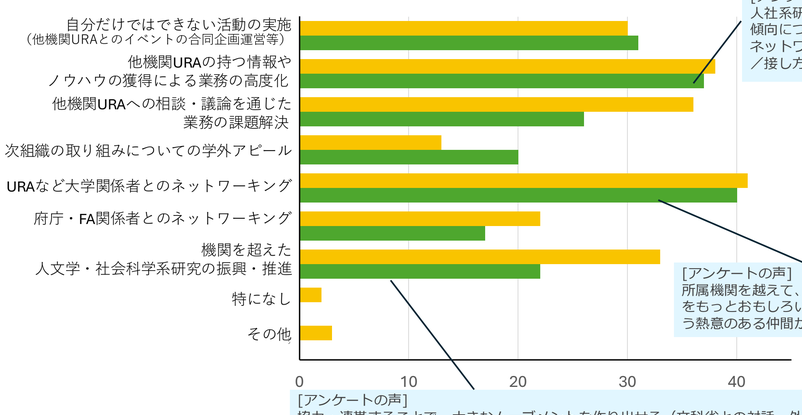
国際 資金 学際・産学連携 社会課題対応・総合知 ELSI 研究の可視化・評価

F#08 参加者・関係者集合写真（2023.3.16, 広島大学）

■ ネットワークメンバーへのアンケート結果

◎実施時期 ：2024.8.26～9.9 ◎対象：幹事校URA（OB/OG含む）計58名
◎回答数 ： 45（回答率 78%）
◎回答者分布：**人文・社会科学系８割／人文・社会科学系以外２割**、現幹事校URA６割

Q1 ■：人社系URAネットワークに参加する前に期待していたこと（複数可）
Q2 ■：人社系URAネットワークの活動に参加した成果や学び（複数可）



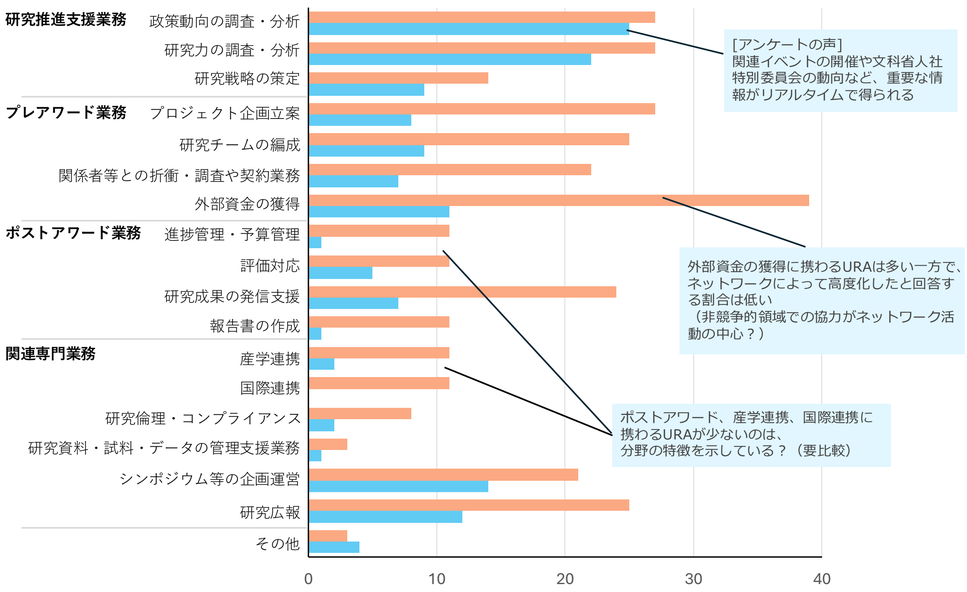
[アンケートの声] 人社系研究者の研究に対する思考や活動傾向についておぼろげに感じていたことが、ネットワークの活動に参加して確信を持てた／接し方に対するヒントを得た

[アンケートの声] 所属機関を越えて、日本の人社系研究をもっとおもしろいものにしたいという熱意のある仲間ができた

[アンケートの声] 協力・連帯することで、大きなムーブメントを作り出せる（文科省との対話、外部資金申請への挑戦、フォーラムをきっかけとした各大学でのELSIセンター設立への挑戦、等）

ユーザーローカルAIテキストマイニングにより作成したワードクラウド（https://textmining.userlocal.jp/）

Q3 ■：人社系URAとして携わっている／いた研究推進業務（複数可）
Q4 ■：人社系URAネットワークに参加したことで、高度化したと感じる自身の業務（複数可）



[アンケートの声] 関連イベントの開催や文科省人社特別委員会の動向など、重要な情報がリアルタイムで得られる

外部資金の獲得に携わるURAは多い一方で、ネットワークによって高度化したと回答する割合は低い（非競争的領域での協力がネットワーク活動の中心？）

ポストアワード、産学連携、国際連携に携わるURAが少ないのは、分野の特徴を示している？（要比較）

Q5 人社系URAネットワークがあったからこそ実施できた活動の有無

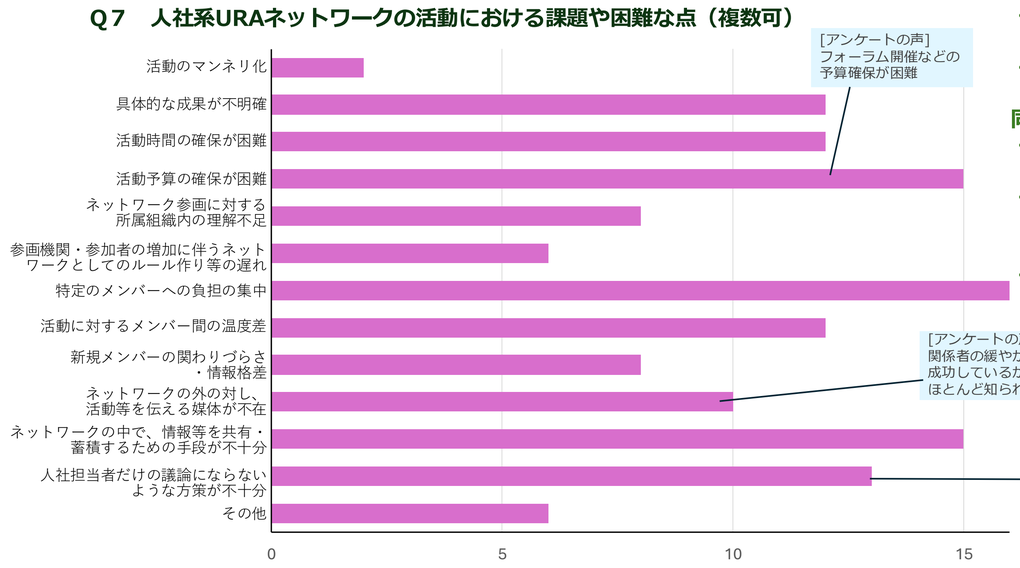
ある 78%/ ない 22%

Q6 Q5で「ある」と答えた方の「具体的な活動」と「そう思う理由」

- **フォーラム・情報共有会の開催**（回答数：8）
- **他機関との共同**（回答数：8）
  （例）複数大学の共同シンポジウム開催、文部科学省事業への共同応募、研究評価の論点地図作成
- **ネットワークで得た情報の還元**（回答数：9）
  （例）外部資金の獲得、学内のELSIプロジェクトの実支援
- **交流・意見交換**（回答数：6）
  （例）若手研究者支援に関する意見交換、文部科学省・FAとの議論の場
- **そのほか**（回答数：4）

※自由記述をもとに区分

Q7 人社系URAネットワークの活動における課題や困難な点（複数可）



[アンケートの声] フォーラム開催などの予算確保が困難

[アンケートの声] 関係者の緩やかな情報共有の場としては成功しているが、おそらくはその外にはほとんど知られていない

[アンケートの声]
・ネットワークが人社系に閉じている良さも実感はしているものの、テーマによっては閉じているデメリットの方が大きい
・人社系URAの集団に閉じた活動との指摘を受けることがあり、決してそうではないこと説明して理解いただくことに苦労している

・活動の持続性について時間・予算・人的資源の3つでとらえる必要
・可視化についてはネットワーク内・外で課題意識

同時にこんな声も
・課題が出てくるということはそれだけ活動が上手くいっているということ
・人社URAがゆるやかにつながることができれば素敵だなと考えていて、そういう意味では現状の活動で個人的な目的は果たせていると思う
・今のなんとなくゆるい感じもよいところがあり、なかなか難しい

■ 「機関をこえたURA連携の意義」とは～10年間の軌跡からの考察

● 人社系URAネットワークの主な特徴・成果
・「組織的責任」と「ゆるやかさ・自由さ」の両面性
・自分・自組織だけで解決できない課題（非競争領域）に関する協力
・重要なテーマを先取りし、多様な立場や組織・セクターによる議論を蓄積

議論テーマ	関連成果（例）
研究の可視化・評価	・日本学術会議第一部「学術の総合的発展をめざして ―人文・社会科学からの提言―」への貢献 ・「DORA Community Engagement Grants」の共同申請および獲得によるプロジェクト実施 ・Japan Institutional Gateway (JIG) の公開（文科省「OA加速化事業」に先んじて導入を議論） ・文科省「人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業（人文学・社会科学研究におけるデータ分析による成果の可視化に向けた研究開発）」（企画、実施協力）
社会課題対応/総合知/学際	・JST/CRDS戦略プロポーザルにおいて人社系URAネットワークの取組が先行事例として紹介 ・文科省「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」（参画研究者コーディネート、実施協力）
ELSI	・URAによる自大学ELSIセンターに対する本格支援の開始

● 機関をこえたURA連携の意義
それぞれのURAが持つ背景・知識・ネットワーク等、多様な強みが組み合わさることにより、
ボトムアップで Co-Creative なURAによる研究推進プラットフォームが実現
→ １機関ではなし得ない課題解決への取組
メンバーの所属組織・機関への還元
URA個人としての成長
ネットワーク内の信頼醸成による企画力・創発性のさらなる向上

● 課題
・活動の可視化不足
・機関間の温度差、機関内の温度差
・よりオープンな活動展開

■今後に向けて
・ネットワークや活動のあり方の見直し
・活動の可視化促進により、波及効果や協力の輪を拡大

【予告】
第10回フォーラムのテーマ
「人社系研究の社会貢献」
2025年3月10日@神戸大

<関心を持ってくださった方へ>
本発表に関する感想やご質問、ネットワークの活動への参加希望等は、以下のQRコードからお願いします！